住（すむ）

木やカヤで「チセ」を建て コタンをつくって 秩序ある暮らしをしていました

自然の材料だけで作り 神々と一緒に住む「チセ」

家にはそこに住む人たちの文化が集約されています。アイヌ語で家のことを「チセ」と呼びます。アイヌの人たちの伝統的な家は、すべて木やカヤなど自然の材料を用い、ブドウのつるなどで結わえて作りました。

内部は地方によって少し違いますが、物置も兼ねた玄関を入ると、中央に炉が切ってあり、その両側が居間と寝床で、家族や客の座る場所も決まっていました。

さらに、奥には宝物置き場や神々の出入りする窓がありました。

アイヌ文化保存のため、平取町二風谷に復元されている昔の家屋（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）

川沿いや河口に つくられた「コタン」

アイヌ語で集落のことを「コタン」といいます。

大きな川のそばや海に注ぐ河口近くの小高いところに数戸〜十数戸からなるコタンが点在していました。コタンの家々には、食料を保存する倉庫、子グマを飼う檻、祭壇などが付属してつくられ、共同の施設として水汲み場、舟着き場などがありました。

それぞれのコタンでは、シカやクマ、ウサギなどの狩りをする山、鮭や小魚などをとる川、着物や敷物、家屋の材料を採取するところなどが、おおよそ決まっていました。

そうした秩序正しい社会生活は、コタンの「村長」を中心にして守られていました。

プ（倉庫）（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）

ヘペレセッ（熊の檻）（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）

チタラペ（文様付きゴザ）（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

祈 いのる 神々の護りに感謝し平和な暮らしを願う「カムイノミ」

（新ひだか町教育委員会提供）

人間に必要なもの 能力以上のものが「神」

アイヌの人たちは、天然現象や動植物、人間の作る道具などすべてに「魂」があり、神の国から使命を担って姿かたちを変えて地上に降りてきていると考えました。その魂は人間にとって有益なものだけでなく、天災や病気などにもあり、このうち、人間の生活に必要なもの、人間の力の及ばない事象を「神」として敬いました。

神々の護りと生活の糧の提供があって初めて、人々の安定した平和な生活があります。そのような生活が続くことを祈願し、これまでの神々の護りに感謝を捧げるのが「カムイノミ（神への祈り）」の儀式です。

イナウ（木幣）
（新ひだか町教育委員会提供）

イクパスイ（奉酒箸）とトゥキ（杯）
（新ひだか町教育委員会提供）

イオマンテリムセ（熊の霊送りの踊り）　（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

神々への感謝と願いをあらわす舞踊

神々への祈りには、歌や踊りも重要な意味を持っています。「イオマンテ（熊の霊送りの儀式）」の後には、「リムセ」、「ホリッパ」などと呼ばれる輪踊りをします。

また、男性によって悪い神を追い払う「剣の舞」や「弓の舞」、女性たちが優雅に舞う「鶴の舞」、「水鳥の舞」など、たくさんの舞踊が今も伝承されています。このようなアイヌの人たちの伝統的な踊りは、国の「重要無形民俗文化財」に指定され、さらに「ユネスコ無形文化遺産」にも登録されています。

アイヌの人たちが伝承する歌の数々

儀式のときなどに座って歌う「ウポポ」、即興的に気持ちを歌うとされる「ヤイサマ」、お酒を造ったり穀物を粉にしたりするときに歌うとされる歌、子守歌や遊び歌など、さまざまな歌が伝承されています。

史 あゆみ

和人によって平和な暮らしを破られ差別と貧しさに苦しみました

商人の横暴と搾取に泣いた松前藩時代

15世紀以降、蝦夷地に和人の移住が増えてくると、アイヌの人たちの平和な暮らしは破られていきました。記録に残る最初の衝突であるコシャマインの戦いはそのころに起こっています。

米のとれなかった松前藩では、藩財政を維持するため、蝦夷地をいくつかに分割し、主だった家臣に知行としてアイヌとの交易を認めました。これを「場所」といい、さらにそれを商人の手に委ねました。これが「場所請負制」です。18世紀以降、アイヌの人たちはこの枠に厳しくしばられ、商人の横暴と搾取による苦しい生活を余儀なくされました。

場所請負制の弊害が目立ったこと、さらにロシアなどの外国船が蝦夷地の周辺に現れるようになったことから、幕府は蝦夷地を直轄領とし、直接交易や、風俗の和風化などを進めました。

しかし、幕府の財政などの問題から長くは続かず松前藩に戻したり、幕末には再び直轄とするなど蝦夷地とアイヌの人たちに対する政策は目まぐるしく変わりました。

大量の移民で生活苦進む明治以降

明治２年、政府は「開拓使」を設置するとともに蝦夷地を「北海道」と改め、本州などからの移住による北海道開拓を進めました。土地の私有制度が定められ、払い下げを積極的に行い、資力のある会社や個人には広大な面積の土地を貸し、開墾すれば無償で付与するという特典も与えました。このため、明治初期に12万人程度に過ぎなかった人口は、30年あまりの間に100万人を超えました。

この間、アイヌの人たちにとっては、過酷な場所請負制度は廃止されたものの、食料などの物資の供給を請負人に頼っていたため路頭に迷い、さらに主食としてきた鮭やシカは和人の乱獲などで資源が減り捕獲が禁じられました。

戸籍の上では「平民」とされ、日本国の一員とされましたが、アイヌの人たち独自の文化が制限あるいは禁止され、社会生活を営む中で日本語の使用を余儀なくされるなど、アイヌの人たちにとっては、社会全体からの同化の圧力が強く感じられる環境になりました。

また、幕末以来、和人によって疱瘡（天然痘）や結核などの病気が持ち込まれ、多くの人たちが亡くなりました。

このような移住民の急増や土地政策、狩猟の禁止などによって、少数者となったアイヌの人たちの生活領域はより一層狭められ、苦しい生活を強いられました。

さらに同化策によって多くの民族文化が失われていきました。

和人の圧迫に抵抗した戦いの歴史

和人の蝦夷地への渡来が増えるにつれ、アイヌの人たちの生活が圧迫され、交易上の摩擦なども重なって、両者の間にいくつかの争いが起きました。

コシャマインの戦い

注文された小刀のでき映えをめぐって、和人のかじ屋が、アイヌの若者を殺したことをきっかけに、1457年、コシャマインはアイヌの人たちを率いて和人の武将たちの居館を襲いました。そのほとんどを落としましたが、松前藩の始祖とされる武田信広の策略によってコシャマインが討たれ、アイヌの人たちは敗北しました。

シャクシャインの戦い

沙流地方と静内地方のアイヌ漁狩猟権をめぐる争いに端を発し、松前藩との争いとなり、1669年、静内のシャクシャインが東・西蝦夷地のアイヌの人たちとともに一斉蜂起しました。戦いは互角のため和睦することになりましたが、その酒宴の場でシャクシャインは謀殺され、アイヌの人たちは敗れました。

クナシリ・メナシの戦い

シャクシャインの戦いの後、和人のアイヌ支配は一段と強化され、1789年、場所請負人らの横暴に耐えかねて、クナシリ（北方領土の国後島）・メナシ（北海道東部）地方のアイヌの人たちが立ち上がったものの、松前藩に制圧されました。主だった37名のアイヌの人たちが処刑され、これによってアイヌ側の和人に対する組織だった武力による抵抗は最後となりました。

シャクシャイン像（新ひだか町、（特非）新ひだかアイヌ協会提供）